

認知症に関する新しい見方 ～救いの道

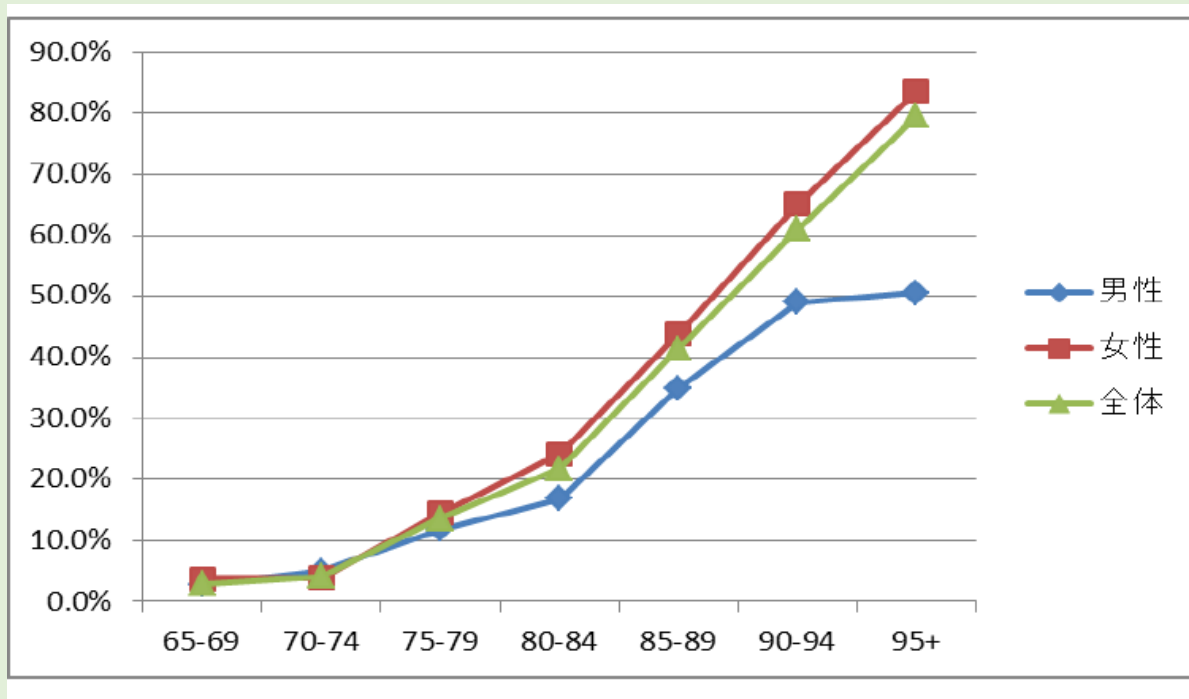
2023-10-9

野口幹夫

第1章 認知症の悩み

認知症は誰もがたどる道とされています。

内閣府が発表している日本人の認知症発生率は 次のページのグラフの通り 85歳を超えると10人のうち4人が認知症になっています。



認知症になるとどうなるのでしょうか。「恍惚の人」(有吉佐和子著)という言葉がある通り本人は気楽な状態だと思っていました。しかしそれは恐ろしい反面を持っています。

新刊書「父はニーチェ」で紹介された状況で描かれている通り、周りに大変迷惑をかけてしまうのです。

第2章 現代医学の答えは

現代医学で認知症は頭脳にたまるゴミのためとなっています。高齢になればだれもが貯めるゴミ。

認知症は、「アルツハイマー型」「レビー小体型」「前頭側頭型」の3タイプです。認知症のなかで最も多いアルツハイマー型は、脳のなかに「アミロイドβ」と呼ばれる不要なタンパクが溜まり、



少しずつ脳細胞が破壊されることで発症すると考えられています。

レビー小体型認知症は、脳幹のほか、大脳の神経細胞にレビー小体という異常タンパクが蓄積することにより発症する認知症です。最新の医学で新しい治療薬が開発されたと報じられていますが、そのごみを軽減する効果があるようです。

今一つの認知症の原因は脳出血や脳梗塞などの血管性認知症です。これに対しては高血圧や糖尿と共通で、食生活の改善と適度な運動がお勧めで、いくなればごく当たり前の生活しか予防法はないのです

第3章 その本質に迫る

認知症になれば、本人は「恍惚の人」と呼ばれる通りむしろ悩みもなく、ハッピーかもしれないと思っていました。だが、「おやじはニーチェ」の父は、やがて荒れ始めます。気に入らないことがあると介護の人に怒鳴り散らし、糞便を撒き散らし、好き勝手に外出し行方不明になってしまいます。問題は周りに迷惑をかけることです。

その本質は「わがままな子」「エゴの丸出し人間」に戻ることといえます

第4章 「わがまま」「エゴの丸出し人間」とは

人間生まれつきは、わがまま、エゴの存在です。

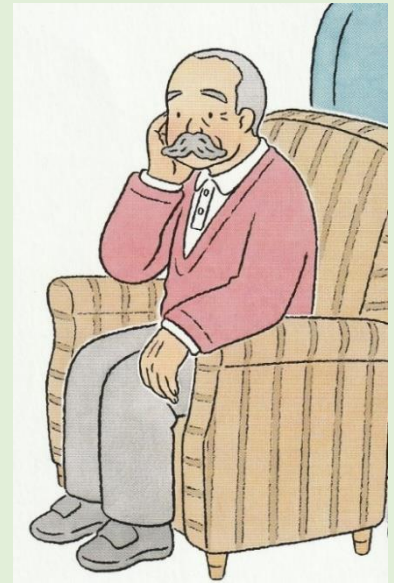
自己保存が優先で育ちます。それはすべての動物に共通です。

しかし動物と違って、人間は生物の中で初めて精神を得ました。

成熟した人間はその精神の力でエゴを抑えて周りの人々に尽くすことができるようになります。

認知症になって、「わがまま」「エゴの丸出し人間」に戻るということは、いわば「精神のタガが外れてしまった状態」といえるかもしれません。せっかく長い人生をかけ、作り上げた精神の支配が崩れ、幼児時代のエゴ中心の特殊な人になってしまったのです。

精神のタガが外れるというようなことは本当に起きるのでしょうか。



第5章 精神とは

この不思議なふるまいをする精神の本体は実はどこにあるのかわかっていないのです。

人生の経験が生み出す貴重な記憶も精神体に蓄えられているようですが、脳の中には後期記憶の蓄積体はどこにも発見されていないのです。

しかし我々は「長期記憶と精神」を持っていることは疑えません。

精神があるから芸術を花咲かせることができます。

動物には言葉ありません。精神は人間だけが持つことができたものです。

人間はまず肉体が成長しますが、遅れて精神が発達してきます。

学童期を経て「自我」が生まれてきます。

それは「精神」が自分自身であると意識することです。

そうすると「精神」である自我が思うように肉体を動かすようになります。

その特徴は精神が、自分のエゴを抑えるようになります。

例えば

眠さをこらえてでも起きて受験勉強をする。

つらい練習をしてでもチームのために頑張る

自分のエゴを抑え、人々のために働こうとする。この崇高さは神が与えた精神だからかもしれません。字の通り神の精なのです。

心と精神は違います。心は脳幹にあり、好き嫌いなどの肉体に関係する気持ちを生みます。それは動物とも同じで旧脳にあります。だから動物にも心はあります。犬や猫を見てもそれがあることはわかります。

人間の脳は進化とともにその外装に大脳新皮質ができ 知能を発達させました。知能と精神は違います。

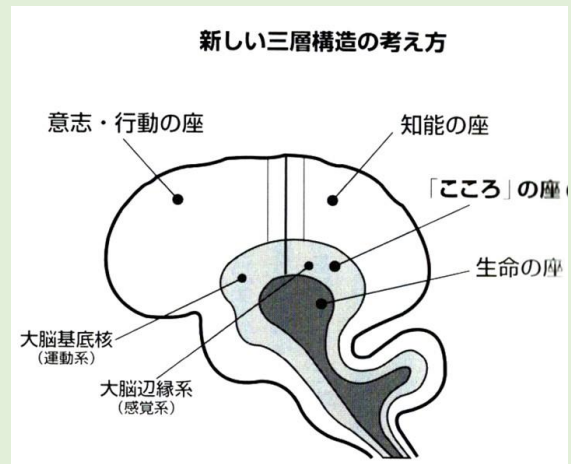
精神は心とは違います。魂とも呼んでいます。その位置は今も図示できません。

まずそれは長期記憶の保存体であり、自分と自覚する本体です。

精神は人間に初めて備わったもので生物進化の法則からは説明できないことでした。

精神を得た人間は複雑な言葉を使うことができ、文化芸術技術あらゆる人間らしいものを生み出しました。

進化の頂点に立った人間だからこそ、特別に与えられたものとか言いようがありません



第6章 精神は医学では発見できない

精神は医学や科学では発見できないのです。それは精神体が今の科学には未知の物質であるダークマター・ダークエネルギーでできているからだといわれています。

医学は頭脳を解剖しても精神体は見つからないから、精神は存在しないと否定します。だから認知症と精神との関係はまるで追求しません。

精神体が、化学物質ではなく、ダークマターでできていると推定するのは理屈に合っています。肉体は3次元の存在で、地上に結び付けられていますが、精神は自由に時空を飛んで想像することができま

す。ダークマターは五次元の存在でだからです。

ダークマターは電気を帯びていませんが重力を持ち、ダークエネルギーは重力に反発する性質を持っています。

今は人間には究明できませんが、頭脳の中枢部である脳幹の部分と重力結合で結びつき、中枢脳を介して、人間の身体を支配し、動かしているに違いありません。

重力結合ですから、強いショックで外れることがあるのです、そんな例を紹介します。

第7章 精神が外れてしまった実際の例

普通はしっかりと支配するため強くつながっているのですが、生きていながら強い脳震盪で外れてしまった人の例が報告されています。

「脳はすごい ある人工知能研究者の脳損傷体験記」という本があります。

著者のクラーク・エリオットは音楽家で人工知能の分野の大学教授でした。

彼はある日、自動車で大学に通う途中、ひどい追突をされました。その瞬間、頭はヘッドレストにあたってボールのようにはずみ、前方に投げ出された。一瞬星が見え それから1秒ほど目の前が、真っ暗になった。意識は朦朧としていた。それでも外傷はなかったので大学に戻った。本人も精神が外れたとは気がつかなかった。

それからの体験記を学者らしく克明に記録されたのがこの本です。脳震盪症というのは、脳と自分自身の連絡経路が不通になっている部分があり、脳信号は迂回しながら、経路を探しながらつながって仕事をしていくのです。

「自分自身がしたいこと」を、「自分の身体がしない」状態になるのです。その結合のゆるみは、休みを取れば少しずつ回復するので、自分一人でやる仕事は時間さえかければできます。しかし人を相手にする仕事るときは、対応が待たないになるので、相手はその状況を理解できず、その仕事も、ひどい時にはその人間関係も崩壊してしまいます。

「自分自身が思うこと」すなわちそれは「魂の思うこと」であり、それに素直に従わない肉体との争いという問題なのです。普通は分けることのできない1体のものが、脳の機械的ショックで、魂と脳が分離している状態なのです。彼は後に脳震盪症の画期的な治療に出会って、脳の修復に成功します。あの懐かしい自分の魂が何日もかけて自分に近づいてきて、ついに自分に入り込んだという感動を覚えるのです。つまりやっと魂と肉体の合体を取り戻せたのでした。

第8章 認知症の場合

認知症の人の、「精神のタガが外れたような状態」はなぜ発生するのでしょうか。頭をぶっつけたわけではありません。「おやじはニーチェ」の例からみると

- ◎仕事が終わったときからすることもなく、精神活動が弱かった。
- ◎さらに妻を亡くして日常注意叱責をされたりすることがなくなって、ぼんやりと過ごす日常となって、ますます精神活動がなくなった。

もともと弱かった精神体との結合が完全に緩んでしまったのです。その人は、抑制のきかないエゴ丸出し人間に戻ってしまうのです。精神体に蓄えられた記憶もすべては引き出せません。この例では若いころの思い出は話すのですが妻の名前もその死もわかりません。これが困った認知症の本質です

第9章 逆に脳にゴミが溜まっても精神の支配を維持できれば認知症にならない

アメリカにナンスタディという認知症究明のプロジェクトがありました（2016年報告）。700名の修道女さんに協力を求めて、日ごろの認知活動を記録し、亡くなったら脳解剖を許可してもらったのです。その結果ある発見がありました。ある修道女さんは亡くなるまで、ごく優れた認知活動をしていたが、亡くなった後の脳を解剖したら、この方の脳にアルツハイマー病変があり、その進行段階は全6段階のうち最も重い「6」の極めて多数の老人斑と神経原繊維変化が観察された。この病変ならばアルツハイマー型病変がすでに最高度に進行していた筈のこの修道女ですが、亡くなるまで極めて高い知能生活を維持していたのです。

脳内のゴミが溜まれば即認知症になるというのが覆されたのです。

第10章 認知症に落ちこまないために

これまでの章で紹介したように認知症は脳に対する精神の支配力が弱まってしまふことから発症することが見えてきました。

すると生涯認知症にならない真の対策が見えてきます。それは自分自身である精神力を強め、その支配力を維持することだとわかります。

精神力を維持するためには、日常を活発に生きることが大切です。仲間との集いを大切に続けること。趣味を楽しむこと。碁でも音楽でも絵画や俳句でも。身だしなみを大切にすること。家事や料理に工夫をしていくこと。子や孫の行方を暖かく見守ること。映画テレビ番組を楽しむこと。などなどともかく生き活きと日常を楽しむことです。

更に精神活動は維持だけではありません。

精神は、肉体とは違って死ぬまで成熟できるのです。

なぜなら肉体の終了とともに、新しい五次元の世界へ飛び出す準備のためなのです。

精神の更なる成熟のための行動はどうすればいいのでしょうか。

まず自己受容から始まります。

自分を見つめなおすことから始め、自分を褒めます。

そのうえでまだ未成熟なところを探します。

周りの人達に敬意と愛をもって接してきたか、エゴを抑えていつも「人のためになることをしようと務めているか」

自分を点検し励まし、何か次の行動をもくろむこと。これが精神を働かせることです。

もう行動ができなくなったら、どうでしょう。次の詩が励ましてくれます。

最上のわざ

この世の最上のわざは何？

楽しい心で年をとり、働きたいけれども休み、しゃべりたいけれども黙り、
失望しそうなときに希望し、従順に、平静に、おのれの十字架をになうー。

若者が元気いっぱい神の道をあゆむのを見ても、ねたまず、

人のために働くよりも、けんきよに人の世話になり、

弱って、もはや人のために役だたずとも、親切で柔和であることー。

老いの重荷は神の賜物。

古びた心に、これで最後のみがきをかける。まことのふるさとへ行くためにー。

おのれをこの世につなぐくさを少しずつはずしていくのは、真にえらい仕事ー。

こうして何もできなくなれば、それを謙遜に受け入れるのだ。

神は最後にいちばんよい仕事を残してくださる。

それは祈りだー。

手は何もできない。けれども最後まで合掌できる。

愛するすべての人のうえに、神の恵みを求めるために。

すべてをなし終えたら、臨終の床に神の声をきくだろう。

「来よ、わが友よ、われなんじを見捨てじ」とー。

ホイベルス神父友人の作 日野原記念ピースハウスに掲示

この詩にある「祈り」それは精神を最も活動させる方法です。

精神を自分に与えてくれた宇宙の崇高な存在への感謝を伝え、いただいたその分身である精神を大切に育てる決心を述べることができれば最高です。

無阿弥陀仏でもシャローム・アッラーでも道は何でもいいのです。その先にあるのは共通の宇宙の崇高な存在ですから。

第 11 章 最先端の医学者がこの説をサポートしてくれた。

先に述べましたように、現代医学の通説は脳内のゴミの蓄積が認知症の原因だとし、薬でゴミ対策をすすめる方向に進んでいますが、これとは違う学説を唱える本が最近出ました。

それは私の説を裏からバックアップしてくれる本なのです。書名は「クスリを使わない認知症・発達障

害・うつ病の治療最前線」著者は篠原伸禎博士 東大医学部脳外科で、2023-4-1 発刊です。

その内容は認知症の原因は、脳内ゴミの蓄積によるのではなく、脳の基底部にある「扁桃体 報酬系」対「帯状回・小脳・視床下部」の相互関係の変化にあると考えています。

「扁桃体 報酬系」は自己保存に働く。身勝手な人間になる。エゴの中心です。

それに対して「帯状回・小脳・視床下部」は、それをコントロールして、人間らしくふるまえる方向にもっていく役割を果たしているとしています。

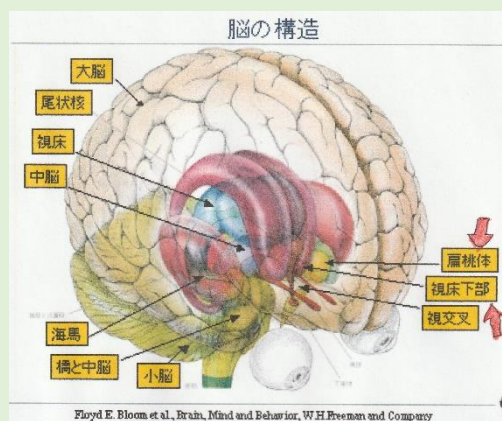
認知症は様々なストレスなどの原因で特に視床下部の働きが弱くなることによって発症するのだと著者は考えます。つまり「扁桃体 報酬系」は、人間のエゴ。それをコントロールする役割が「帯状回・小脳・視床下部」、それを「精神」と置き換えれば、これまでのわたしの説と同じだとご理解いただけます。

「精神」の存在を認めない現代脳医学による認知症発生のメカニズムの見事な説明でした。ただしこれでも認知症の特徴である記憶喪失の説明ができず、やはり精神のタガ外れの方が全体をよく説明できますが。

この著書はさらに同じ社会問題の裏返しの深刻な問題として子供の発達障害を取り上げておられます。それを最後に紹介します。日本において高齢者の認知症と並んで発達障害児の激増が起きているのです。人生の両端において起きている問題ですが、別々のことではなくて根っこのところで精神軽視という共通の原因を持っている気がします。

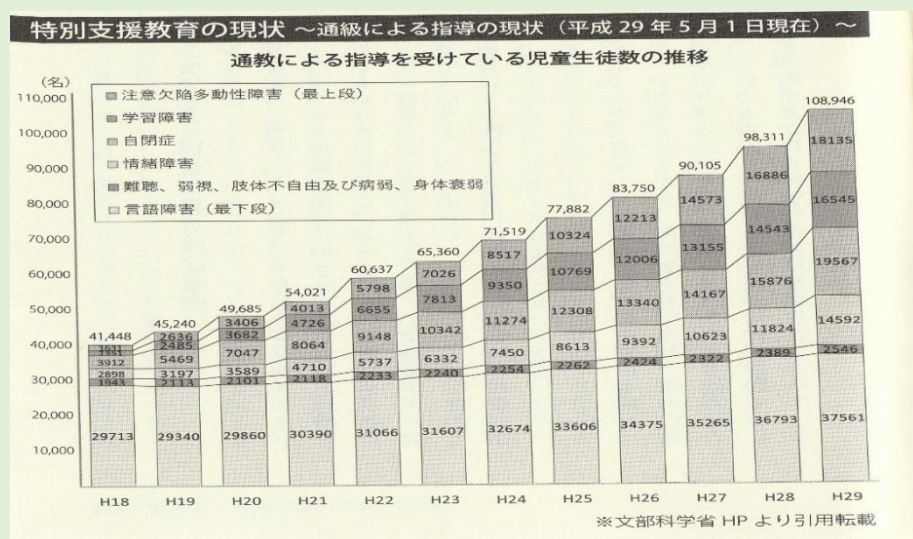
発達障害は6歳までの両親のこどもへ愛情に満ちた教育的な接し方が決定的です。

若い子育て世代は、我々高齢者よりもさらにデジタル社会になじんでおり、幼児にスマホを見せてご機嫌を取り、自分もスマホのゲームに夢中という風景を電車でも見ます。共働きで専業主婦の不在も拍車を



Floyd E. Bloom et al., Brain, Mind and Behavior, W.H. Freeman and Company

かけます。



6歳までの幼児の精神の成長は、親に育てられる中で、信頼感、自立性、自発性が育つ時です。

精神の生育成長の長い旅路の充実を、子育て世代から豊かに始まるように、心から願い、支援していきたいと願います。

終わり